

女子教育を想う

小野 興子

学校法人山梨英和学院理事長

3月8日の国際女性デーを前に、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の会長（当時）である森喜朗元首相の女性蔑視発言を受けて、各界のリーダー達が、性差別を含むあらゆる差別のない日本をつくるために立ち上がった。森氏の発言の波紋がさらに広がりを見せる中、一転して、新会長には女性の橋本聖子氏が選出された。今頃になってという感は拭えない。

山梨英和学院は、本年創立132周年を迎える。創設者新海栄太郎らは妹にも高等教育を受けさせたいと願ったが、女子が通える学校はなかった。栄太郎は当時キリスト者として、キリスト教主義の女学校をつくりたいと願った。そこに同志が集まり創設への意欲が高まった。しかし「女には教育はいらない」と考える人が多かった時代背景があり、その道は険しかった。キリスト教徒となっていた栄太郎は「神の前に全ての人が許され、人格として尊重され、愛される

存在であること、一人ひとりがかけがえない大切な生命を神から与えられている」という考えに基づき、カナダ宣教師の力を借りて開学にこぎつけることができた。

現在もこの意志を受け継ぎ、山梨英和中学校・高等学校では女子教育が行われている。さらにその建学精神を発展させるべく、1964年山梨英和短期大学が創立された。その後2002年に現在の山梨英和大学が開学し、共学となった。

山梨英和中学校・高等学校にて教育を受けた私は、大学でも、またその後の職業においても女性社会の中で過ごしてきた。しかし固定観念にはこだわらず、男女の差を感じることなく過ごすことができてきた。

本学（学校法人山梨英和学院）の理事長として就任を受け入れることができたのは、私自身の実力を超えたところで、見えない大きな力が働いたからである。そこには栄太郎の思想があり、私のミッションで

もあると捉えたからである。女性理事長は残念ながら私でまだ二人目である。職務を遂行しつつ日頃思うことは、もつと多くの女性の登用を願わずにはいられないということだ。

森氏の女性蔑視発言からは、男女のパワーバランスの均等が得られていないだけでなく、女性の意思決定さえもできない社会構造が見え隠れする。女性がノーと言えず、それを見逃してしまう土壌が拭い去られていなかったからだろうか。日本の男女格差指数は世界の国々の中でも格段に低いことも示されている。これらの現状を見ても、日本の意識の低さは拭い去れない。この森氏の発言は、今後の日本における社会構造を変えていく一つの契機となるに違いないと考える。

本学院を見渡しても、中学校・高等学校では現在も女子教育を続けている。果たしてこのまま女子教育を継続させていくべき

なのかと、考える契機でもあると思う。

女子教育を存続させていこうとする動きもある一方、男女共学のもと、性差を越えたところで、人間として互いに尊重し合える人格形成のための基礎を築く必要性を感じる。

本学創始者である新海栄太郎が示した思想は、根本的なところでは人間の基本的人格形成に根差した教育であったであろう。

本学における教育の指針としては、女子教育や男女共学にこだわることなく、校訓に掲げられている「敬神・愛人・自修」にあるキリスト教主義に根差した教育をこれからも継続しなければならぬと強く思う。

国際女性デーの趣旨においても基本的な人間愛を目指し、それを推進するため、この運動が途絶えることのないように、世界の国々が国境を越えて、理解と共感と連帯を深めていくことが求められていると考える。